

「第13回FDフォーラム」

場所：立命館大学衣笠キャンパス
 期間：3月8日

1. 研修の内容

第13回FDフォーラムのテーマは「大学教育と社会 FD義務化を控えて」である。基調講演を期待して参加したが、残念なことに、講師の体調がすぐれず中止となってしまった。このため、次のシンポジウムのみを聞くこととなった。

シンポジスト3名の発表で参考となった点のみを記したい。

中村正氏は、立命館大学における現状や実践を話された。そのなかで特に印象的だったことは「学びのコミュニティ」である。特に立命館としては大規模大学としての特性をうまく活用したいと考えているようである。同時に、京都の大学がこれまで進めてきた大学コンソーシアム京都の活動に直結する。それだけではない。学生は授業以外にもクラブ、サークルを通して多くのことを学んでいる。さらに、大学の教師は毛嫌いしているが、学生はバイト先でも多くのことを学んでいる。その総体を「学びのコミュニティ」と概念化し、その分析を行おうとしているようである。このような観点は、愛知県の大学にはないし、愛知大学にもない。

もう一つは、FDに加えSDが強く叫ばれ、それを統合しさらに昇華する形でのprofessional developmentが必要だと主張されたことである。私は日頃から愛知大学事務職員の専門化、専門性について思うところが大きいので、大いに参考となった。私は大学教員の仕事は、研究、教育、行政の3つだと考えている。しかしながら、行政面においても専門家であらねばならぬということを、すべての教員に対して求めるべきものなのかは疑問である。とはいえ、愛知大学のように経営者のいない大学においては立派な研究および教育を完結させるために行政的な裏づけが必要なことも事実である。

飯吉弘子氏は、産業界が学生に求めているものを自発的知的拡張力とした。実業界は大卒の学生を即戦力として期待しているわけではない。この自発的知的拡張力はまさに大学が希求するものと同じである。さらに、それは実現するのが教養教育と呼んでもよいものである。氏の発表において気になった点は、教養教育を専門教育と対立されて考える伝統的理解である。私の考えでは、両者は対立しない。専門教育科目と対立する概念として基礎教育科目が存在し、両者はともに教養教育に資する。国民のなかのエリートのみが大学教育を受けている訳ではない。そのような状況を念頭に置くなれば、かつてのような専門教育は存在しないし、それは大学院において行われるべきものである。では、学部教育がすべてこれまでのような幅広い教養科目の教授に還元されるというものでもない。本当の意味での「教養教育」が行われるためには、奥深い知識に達する専門的技術や方法論や知識が必要であることをしっかりと認識すべきである。

河合塾教育研究開発本部の滝紀子氏の発表は予備校の視点からのもので、情報としては貴重なものが多かった。

学部長	FD委員長	FD委員会	企画・広報課長	係